

庭園は文化の表看板

宮林家庭園を考える

土沼 隆雄

はじめに

世の中、迷走してくると、必ずコトの本質論を問う声がどこからともなく湧き上がり、その真実や価値に立ち戻ろうとします。

庭園ではどうか。たしかに昨今の多種多様なライフスタイルや好みが新しい庭園のイメージやデザインを生みました。しかし、いつからかそれらは偏重され、その結果、「何でもあり」のような風潮も生まれ、庭園の攪乱状態を招いて、そのさまはあたかも迷走しているかのようです。

そんな中、「これこそが本当の庭園であり、他は邪道だ…」とか、「日本庭園とはこういうものだ」とか「樹木はこのように配植し、石はこういう風に組むのが本当だ」、はたまた「庭園の文化財的価値とは」などと庭園の本質論議？が交わされています。

しかし、このような議論は言わば庭園の形の議論であり、庭園の向こう側にいる“庭園を楽しもうとする人”が傍らに追いやられ、庭園と人とがどんどんかけ離れていっては困ります。

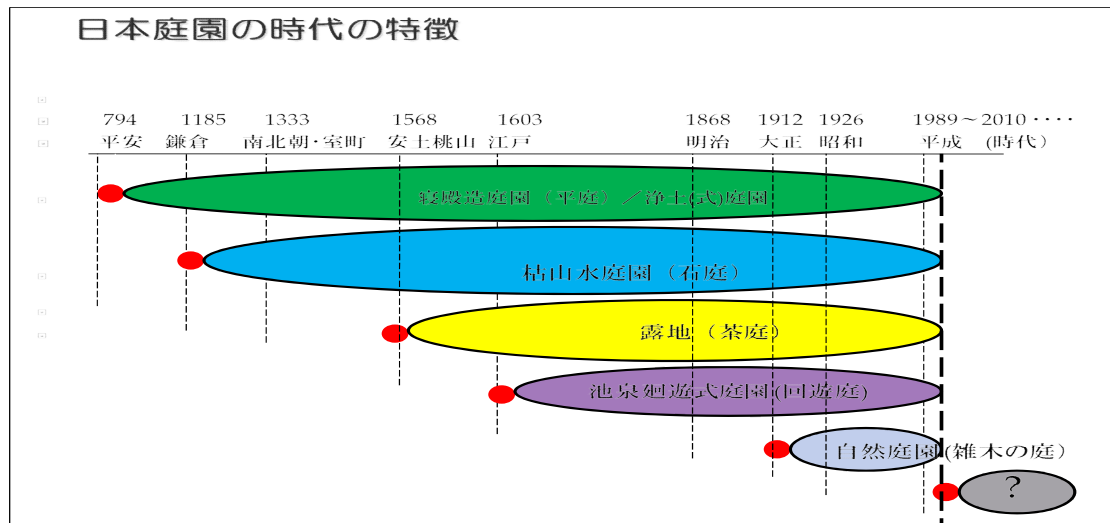
庭園の本質とは、庭園の形そのものではなく、「人と庭園との関係の本質である」と私は考えています。ここに重要な意味があります。

幸い、日本は歴史的にみても質の高い庭園文化を築いてきました。少々生真面目（きまじめ）な作風ですが、作り手も所有者も一生懸命に生きてきた足跡をみる気がします。自然を見つめ、我（われ）を見つめ、究極的には自然と我を一体化させる。そんな崇高な精神性と豊かな感性が、独特の「美の世界」を表現してきました。

庭園には二つの所有形態があります。一つは庭園そのものを身近につくること、もう一つは庭園に出かけていくことです。これからの時代は、益々庭園に出かけて行き、我が庭のように庭園を楽しむことが主流になるでしょう。

庭園とは、ゆったりとした気分で眺めることが楽しい、人と語り合うことが楽しい、学ぶことが楽しい、育てることが楽しいなど、楽しいことがギュッと凝縮して積み重なった「生きがい」や「やりがい」に連なっていく場であって欲しいものです。庭園を通して豊かな人生とは何かを見つめてみたいと思います。庭園と我々人間との本当の関係とは何か、それを結ぶ手段としての庭園の発見。今、もう一度このような観点から庭園を考えてみましょう。

1. 日本庭園の大きな流れ



造園の系譜

その昔、狩猟から農耕へと生活のスタイルが変わると、人々は農作業をするための多目的な場＝「にわ」を持つようになりました。後に、そこに好きな木や草花を植えたり、池や流れを配して自分の身近に好みに合う美しいと思う自然を取り込んでいきました。こうして発祥した素朴な「にわ」がある一方で、平安時代には貴族たちの政の舞台としての施設（寝殿造り建築）とそれに付随した庭園が現れ、現代に見る庭園の形がほぼ出来上がったのがこの平安の頃だと言われています。

平安時代には、貴族たちの政（まつりごと）と遊興の舞台としての寝殿造庭園が現れました。また、大陸からきた仏教の影響で、心深く祈る仏の世界をモチーフとした浄土（式）庭園も出現しました。室町・桃山時代には、能や茶の文化が開花しました。数寄者といわれる人々が茶に禅の精神を吹き込み、目に見えないものに高い精神性を見だし、侘び、寂びに無常観やものの哀れを重ねた美の世界と感性を育てました。これらは露地（茶庭）の精神的土台となりました。

日本庭園はよく「見立ての文化」と言われます。白砂を大海に、石を仏に見立てる石庭などの枯山水庭園。本来の使用と違う用途を庭園に持ち込み、斬新な美と価値を発見して育ててきました。日本庭園はよく「見立ての文化」と言われます。白砂を大海に、石を仏に見立てる石庭（枯山水）。本来の使用とは違う用途を庭園に持ち込み、斬新な美と価値を発見して育ててきました。

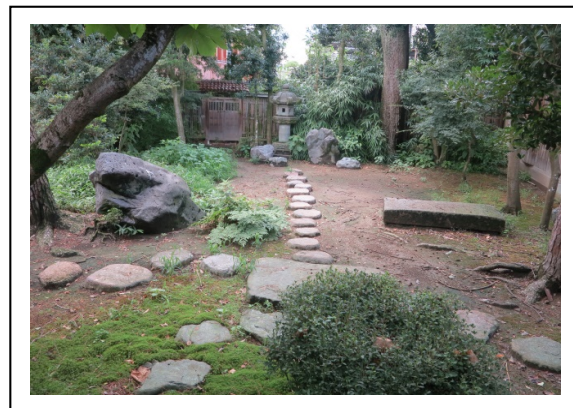
さて、江戸時代になると大名庭園が多くつくられ、広大な敷地に池を中心に歩き廻る池泉廻遊式庭園が発達しました。明治時代に入ると「造園」という総合領域が生まれました。「庭」は伝統的日本庭園（個人領域）と公共造園（公共領域）とに

大きく分かれて歩くようになりました。そして、現代では、風景や景観などの概念も含んで実に多様な領域を抱えるようになりました。伝統形式の日本庭園がある一方で、野の自然をそのまま取り込んだ**自然庭園**も多くつくられています。

風景や場所が持つ特色に、より大きな視点を置くランドスケープ※1。自然基調・生物生態系などの領域（エコロジー）。観る庭から使う庭＝社交の場（ガーデニング）への移行まで含め、これからも時代と共に人と共に変化していく庭園。そのなかで、日本庭園は時代の変化を吸収し投影しながら、未来へと受け継がれています。

2. 宮林家庭園

架け橋を渡り大門を通過してすぐの敷地は広大な広場となっており、迎賓と共に多目的な利用に供される前庭で、建物など威風堂々としたその様に加えて地主や豪農の敷地取りにみられる典型的な土地利用の形態が残る。主屋に付設された土間庇は巾一間ほどもあり、飛石は直線状に打たれ土間は真砂土系のたたき仕上げとなっている。類似の形態は成巽閣露地（文久三年）にもみられ、茶事が盛んな金沢地方で見られる「軒内露地」で、雪深い地の地域的な特徴を有しているが、一方、多雪な新潟地方では見られない北陸固有の形態として面白い。土縁内に据えられた沓脱石は長さ一間半ほどもある立派なもので、周りに打たれた飛石も含めて丁寧な加工がされている。



庭園の特徴としては、池泉回遊式庭園に露地（茶庭）、坪庭を併設している。いくつか庭園の要所々に蹲踞が組み立てられて「茶」に関心があったことがうかがわれる。特に新座敷前に組み立てられた蹲踞は、構成力が巧みで鉢前が美しく、特に使う（実用）というよりも眺める（鑑賞）ことに主眼を置いた縁先の蹲踞である。ここでもそうであるが、蹲踞周りでは孔隙のある「虫食い」状の奇岩が添えられており人目を引く。また蹲踞の特徴として鉢前周辺に「滝石※」が踏み石、添え石として多用されており、これは成巽閣、西田邸庭園ほか金沢の名邸で見られる極めて特徴的な景石である。手水鉢や灯籠はいずれも秀悦で総じて出来がいい。特に金沢地方では景物としての手水鉢や灯籠は、言わば投機的意味合いがあり、高価なものは値を崩さず高価なままで売買され伝承される伝統があると聞いたことがある。よってこれらの優れた景物は、江戸の大名庭園が解

体された当時に払い下げたものを、作庭時に目利きによって搬入されたか、京都方面から運び込まれた可能性が高い。主庭の池はその昔「蓮池」として造られたが、庭園構成面から主体的な役割は見られない。庭園内には、イチイ、カリン、ヒサカキなどの吉祥木が見られたほか、古庭園でよく見られるタラヨウは珍しい。

※滝石―石川県羽咋市柴垣海岸から産出された花崗片麻岩で表面に亀裂模様がある。玉泉園兼六園ほか金沢市内の多くの庭園で見られる名石である。現在は産出されていない。

3. ニッポンの技

日本を美しい「庭園の島」にしようという 21 世紀の国づくりプランが、1998 年に第五次全国総合開発計画で示されました。今までのまちづくりでは日本の良さを消失してしまうという危機感から、日本独自の庭園思想を計画に導入し、国土保全から地域の独自性、新時代の生活スタイルの創造まで見据えています。庭園は今まで個人趣味で箱庭イメージが強く、技巧すぎてとてもまちづくりに応用できないと言われてきました。しかし、宮林家庭園にみられる現代人の心にジーンと染み入る日本の風景観、伝統庭園が持つ理想の美しい世界をつくる「ニッポンの技と心」が、将来において鉄、アルミ、ガラス、コンクリートで画一化された人工環境を改変し、土地の固有性や歴史、故郷への想い、地域の自然などを最大限に生かす環境再編の手段として新たな価値を生み出してくれるでしょう。

現存する多くの歴史的庭園を土地の風土性を的確に表現した地域版モデルとみれば、まさに我が町わがふるさとの貴重な社会ストックであり、身近でしかもこれほど時代史、生活史を伝える文化空間は少ないはずです。「庭園の島」構想は、自然、歴史、文化が薫る地方地域の知恵が下敷きになっていますが、残念なことに私たち自身はそのすばらしさに気づかず、その英知を身の回りの社会で活(い)かせないでいます。ともすると自分自身すら見失ってしまいかねない現代社会の過渡期の今だからこそ、もう一度、自分に合った環境、着慣れた普段着の生き方を先人達の知恵から学びたいと考えています。

(語句の説明)

※1 ランドスケープ：もともとの意味はその土地らしさ、広義には景観とか風景とも訳す。「造園」に対して特にアメリカ的発想を土台にしたものを「ランドスケープ」として区別する

※2 池泉廻遊式庭園：林泉庭園の一つのかたち。歩きまわりながら様々に違った景色を楽しむ伝統形式。視点場の違いによって池泉定視式庭園と池泉廻遊式庭園に分類ができる

(参考資料)

「庭園を読む」新潟日報連載 土沼隆雄 2008、「史的庭園形成における地域性に関する研究」土沼隆雄 1998

①宮林彦九郎-射水郡新湊町の綿屋宮林家-近代名土家系大観、②新湊物語～北前船船主綿屋彦九郎、③1879年コレラ流行時の有力船主による貿易活動、④「日本の石 産地と利用」飯島亮他 大和屋出版(1978)

*土沼 隆雄（とぬま たかお）

1953年新潟市生まれ

新潟大学大学院修了、(博士)工学

(株)要松園コーポレーション代表取締役

(賞)

日本造園学会賞 奨励賞（技術部門）（2011）

日本造園学会 学会賞（研究論文部門）（2014）

（著書・論文など）

『住宅植栽マニュアル』建築知識共著

『越後／新潟の庭園』東京農大出版会（2014）

『新潟の庭／スケッチ＋事例紹介』（株）博進堂（2018）

『庭園に想う』（株）博進堂（2022）

（論文）

「新潟地方の史的庭園における地域性に関する調査研究」土木学会（1998）

「新潟地方の史的庭園における構成と環境要因に関する調査研究」土木学会（1999）

「史的庭園形成における地域性に関する研究」新潟大学学位論文（1999）

「ポートランド市ワシントンパーク日本庭園の成立過程の特徴に関する考察」建築学会（1999）

「ポートランド日本庭園のディレクターシステムが果たした役割・意義と国際交流の多面的効果」日本造園学会（2011）

「(財)北方文化博物館と米国・箱根財団の姉妹庭園締結に至る経過とその意義」日本造園学会（2013）

「旧齋藤氏別邸庭園を事例とした近代和風庭園の保存のための調査・計画手法」日本造園学会（2014）

「旧齋藤氏別邸庭園における老アカマツの外傷治療・倒伏防止等の措置事例」日本造園学会（2014）

「姉妹庭園関係の締結とその意義」日本庭園学会（2014）

「郷土造園家が担う庭園マネジメントと国際交流」日本庭園学会（2015）

「新潟地方の庭園と地域性／現代にみる降雪への対応とその作庭事例」日本造園学会（2023）